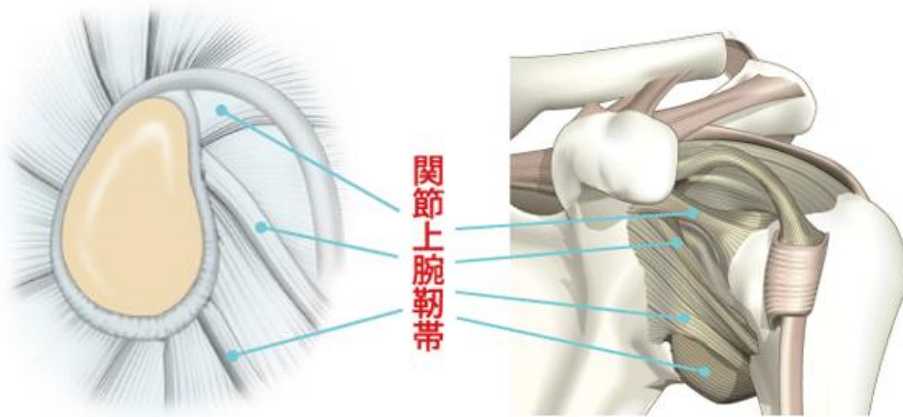


施術の説明 同意書

- 病名： 肩関節拘縮 ————— 非観血的受動術
- 病態：



肩関節は、関節包や関節上腕靭帯という組織で袋状に覆われています。現時点では、これらの組織やその周りの筋肉が硬くなっています。硬くなると炎症が生じやすくなり、痛みが出ます。痛みが出ると肩を動かさなくなるため、関節はさらに硬くなります。「硬い」－「炎症」－「痛み」－「硬い」－「炎症」－「痛み」・・・という悪循環が生じており、病態を改善させるためにはこの悪循環を断ち切る施術が必要です。

- 施術が必要とされる場合：

治療の初期においては、理学療法や薬物療法を行います。その効果が乏しく、回復に長期間かかることが予想され、日常生活に支障が出る場合は施術が必要になってきます。

- 施術の目的

- ① 現在の症状の緩和
- ② 肩関節機能の改善

- 麻酔：

施術は斜角筋間ブロックという伝達麻酔で行います。超音波エコー機器を用いて、注射針を正確に神経に到達させて、上肢を無痛状態にします。麻酔の効果が十分にでるまでは、注射後 15 分位かかります。

年 月 日 署名 _____ (続柄)

● **施術方法：**

伝達麻酔の効果が十分に出たのちに、ベッド上に横たわり、肩関節を全周性にストレッチします。肩関節内の硬くなった組織が伸長され切れ目が入ることにより、徐々に肩関節の可動域が改善します。施術時間は15分程度を予定しています。

ストレッチ後に、肩関節内にも消炎鎮痛薬を注入し、施術後の疼痛を緩和させます。

● **リハビリテーション：**

術日～術翌日までは、伝達麻酔によって右上肢の筋力低下が起きるため、三角巾を用いて患部を安静にします。筋力と知覚の回復に合わせ、早期から積極的に上肢の可動域訓練も開始します。特に施術後1週間のリハビリテーションが極めて大切になります。術後早期の段階で、高頻度でリハビリを行うと、回復が早くなります。その後、1～3か月ほどかけて、肩関節の機能が徐々に回復され、徐々に疼痛も軽快していきます。

● **合併症：**

発生する確率は低いですが、以下のような合併症を引き起こすことがあります。

局所麻酔剤のアレルギー反応 局所麻酔中毒

上肢の骨折 筋損傷 神経損傷 可動域制限や疼痛の残存

予期できない内科合併症 など

万一合併症を疑わせる症状が生じた場合は、患者様の症状を最小にとどめるため、あらゆる努力をいたします。

● **総合判断：**

合併症が生じる確率の低さと施術のメリットの大きさを比較し、今後のことを総合的に考えると、非観血的受動術が現状において最適な手段と考えます。

医療行為は患者様のご理解なしには行えません。不安に思われること、疑問に思われることなどありましたら、遠慮なくスタッフにご質問ください。施術に伴う危険性を十分ご理解したうえで施術を受けることに承知いただける場合は下に署名をお願いいたします。

年 月 日 説明医師 石井 壮郎

年 月 日 署名 _____ (続柄)